
還り路

珠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

還り路

【Nコード】

N8561B

【作者名】

珠羽

【あらすじ】

転入生のユリは、人の前世が分かるという。彼女の【力】で、本人が自分の前世を語りだす。ある者は動物、ある者は江戸時代、ある者はロシアの子供…

【1】*ユリ

校内に、授業終了を知らせるチャイムが鳴り響く。

英語の授業が終わって、皆が伸びをし始めた一時間目の休み時間。

「私、人の前世分かります。」

転入生は突然言った。

私達は一瞬押し黙り、その後軽蔑するような笑い声を小さく漏らした。

一週間前転入してきた転入生…笹川ユリは、女の私から見てもひどく可愛い子だった。

ミディアムロングの髪の毛は静かにはねていて、その真っ白な肌からは思えないほどにしっかりとした目をしていた。

皆一瞬でユリの虜。

いつせいに話しかけた。

だけど、ユリは人と話すときに相手の目を見ていない。

いつもその人の目を通して、遠くを見ていた。

そして、急に哀れむような目になったり怒るような目になったり。

だから、ってわけじゃないと思うけど。

皆なんとなく「絡みにくい子だ」って思っていた。

そんな子が、転入一週間目の一時間目の休み時間にして本性(?)をあらわした。

「私、人の前世分かります。」

そうか、本性は妄想の激しい痛い子…、いや、これはイメージを変えするための作品かもしれぬ。

私は自分の席からユリを眺めて考える。

「…えー、スゴイねー。」

誰かが棒読みで言う。

すると、ユリはその声の主を睨んだ。

「信じてない？」

声の主　我がクラスのムードメーカー、暁裕也は肩をすくめて、ニヤリと笑っていった。

「その質問、結構無意味でない？返事決まってるし。」

皆の間で、軽い笑い。

ヒドいなー…と思いつつ、何も言えない私。

だって本当の事だし。

ユリは溜め息をつき、憐れむように裕也を見る。

「だって、有り得ないじゃん。」

裕也の隣で、神崎浩平が笑う。

「頭大丈夫ー？」

小学生か、お前は。

浩平の誘った黒い笑いを破り、ユリは言い放った。

「じゃあ、まず神崎君のから。」

浩平は一瞬息をのみ、はあ？と呟いた。

「神崎君。ここ座って。」

ユリは自分の前の椅子を示す。

黙りこくる浩平の背中を裕也が思い切り押しした。

顔がニヤついている。

浩平はよるめきながら席につく。

「変なこと言ったら許さねえかな。」

ユリを睨む浩平。

へんな事って、前世はノミでしたね貴方、とかそういうのかな。

ユリは涼しい顔で微笑む。

「大丈夫。」

「そんな事言って」話すのは、神崎君だから。」

静まる教室。

その沈黙を破り、浩平が吹き出す。

「俺は何も言わねえよ。馬鹿じゃん。」

何言ってるんだ、おい。

そんな笑いが広まったが、ユリは気にせず、手のひらを擦りあわせた。

「言うのよ、ソレが。神崎君はコレから、自分の一つ前の自分を思い出す。それから、その自分の一番強い思い出さ。」

ああ、先生。

この子どうすればいいですか。

私は思わず髪をかきあげる。

コレ、困ったときの私の癖。

「っていつかさー、ホント何言ってるの？」

浩平が立ち上がろうとした。

声が低い。

キレちゃったのね。

ユリは浩平の肩に手をのせ、顔をぐっと近づける。

わお、大接近。

ユリは唇をスウと動かして言った。

「お願い、座ってて。」

浩平はモゴモゴ何か言ったが、静かに腰を下ろす。

後ろで裕也が口を尖らせ、ヒュウヒュウとはやしたてた。

浩平はうるせえって怒鳴ったけれど。

でも、今のはやっぱりユリを可愛いと思ったんだ。

ユリのお色気作戦の勝ち。

本人がそう思っていたかは知らないが。

私は薄く笑みをこぼす。

ユリは浩平と向き合い、右手をスッと浩平の額にかざした。

いまや、クラス中がこの二人を見ている。

私だけだったかしら。

あのままデコピンしやしないかと、軽く期待していたのは。

「なーんてっ、嘘ーん！」

て、ユリが叫ばないかななんて。

…怖かったのよ、雰囲気が。

さっきユリは、

「神崎君はコレから、自分の一つ前の自分を思い出す。それから、その自分の一番強い思い出も。」

なんて言ってたけれど、ソレすら理解できなかった私には、この雰囲気はあわな過ぎた。

「いくよ。」

ユリが短く言い、周りからひそひそ声が消える。

浩平はかったるそくに頷く。

「目瞑って。」

素直に従う浩平。

ユリは浩平の頭に触れ、ぎゅっと目を瞑った。

その時何か呟いたようだけれど、それは本当に小さな声で短く呟いた言葉だったから、私達には聞き取れなかった。

途端、浩平がガクンと前につんのめった。

誰かが悲鳴のような声を上げる。

ユリは浩平の体勢をたてなおしてやると、その鼻筋を人差し指ですとそった。

そしてはつきり囁く。

「目をあけて。」

浩平は一瞬黙ったが、すぐに目を開けた。

しかしその目は虚ろで、何処を見ているかはつきりしない。

ユリは彼に聞いた。

「貴方は今何という名で、何処にいますか？」

浩平はふっと微笑を漏らした。

そして答える。

「けつたいなこと聞きますなあ？僕はコウで、宮子を待ってるんじゃないの。」

皆一瞬黙り、ざわめいた。

(答えになってないけれど) 答えたその声やしやべり方は、明らかに浩平のものではなかったからだ。

ユリは平然とした顔で続ける。

「そう、そうでした。状況を詳しく教えてくださいな。」

「しょうもないこと言うなあ。ほなそうしたるから…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8561b/>

還り路

2010年12月12日02時54分発行